

両ダンゴのチョーチン釣り

短竿編・長竿編

●釣り方のコツ

両ダンゴのチョーチン釣りは、大きく分けて2通りの釣り方があるといえる。ひとつは、短い竿で浅ダナの延長的な釣り方のチョーチン釣り。もうひとつは、長い竿でコンスタントに型のよいへら鮒を狙うパターンである。

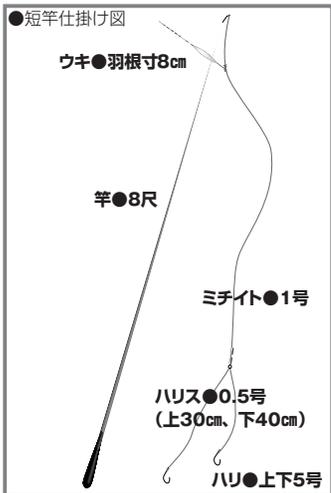
短竿のチョーチン釣りは、浅ダナの延長的なイメージでやや小さなウキを使い、落ち込みからのアタリをすべて合わせていきながら、時合を作るやり方。タナ1mの釣りに近く、モドシヤ、ハリスの倒れこみのアタリなどを積極的に合わせながら、エサのタツチヤ、大きさを合わせていき、爆釣パターンを引き出す釣りである。

一方、長竿チョーチンの場合は、一投一投を大切に、釣るタナに魚を寄せることから始める。エサを打ち、魚が寄

ったら、エサがオモリの位置からなじみきる位置までの範囲で食べやすいエサに調整する。

バラケ過ぎると、バラケて拡散した麩の粒子に魚が興味を示してしまい、ハリに付いたエサには食いつかなくなってしまうし、バラケが足りないと魚の興味がなくなってしまう。釣り方のポイントは、エサがなじみきってからのアタリを取るように心がける。ボディの突き上げアタリや、エサ落ち目盛りの前に出る早いアタリには極力手を出さず、なじみきってからのアタリをとるようにする。

こういったアタリの調整にはエサの大きさが重要になる。エサのサイズは直径2cmくらいが目安で、小さくすると早いアタリが出てしまうので、そうならないように注意を払うことがこの釣り方のポイントといえる。



●短竿仕様のベースエサ

特S200cc+パウダーベイトヘラ200cc+天々200cc+浅ダナー本200cc+水200cc



●作り方 / 「特S」200cc+「パウダーベイトヘラ」200cc+「天々」200cc+「浅ダナー本」200ccを粉のうちによくかき混ぜて、水200ccを加えて全体に水が浸透するようにかき混ぜる。このときは、あまり練らないこと。

釣れないときは、こうしよう!

ここがポイント

アタリがなくなったとき

サワリがあるのか、ないのかで対応が違ってくる。まず、サワリはあるが決めアタリがない場合は、練りこむことで対応する。練り込み回数は10回を目安として、30回まで練りこむ。

サワリもなく、アタリがなくなるパターンは、先のサワリはあるのに決めアタリがなくなったので、練りこんでみたという場合に起こりやすい。このときは練り込まないで、手水をつけて軟らかくしてやろう。

それでもアタリが復活しない場合

ベースエサに、「バラケマッハ」200ccを加え、水を125cc加えたエサにチェンジする。このエサは、バラケの促進とタナのまとまりを出す特長がある。



ここがポイント

カラツンで釣れないとき

手水で軟らかくしたり、大きさを小さくしたり大きくしたりする。

軟らかくするのは、ボソによるカラツンの対策。大きさを变えるのは、タッチは合っているけれど、大きさが合っていないで釣れないということを解消するためだ。



●長竿仕様のベースエサ

特S200cc+パウダーベイトヘラ200cc+天々200cc+バラケマツハ200cc+水200cc



●作り方/かき混ぜて、水がなじんでから、10回くらいボールの縁にこすりつけてから使用する。

釣れないときは、こうしよう!

アタリがないとき

魚がいないと考えられ、竿をチェンジする。

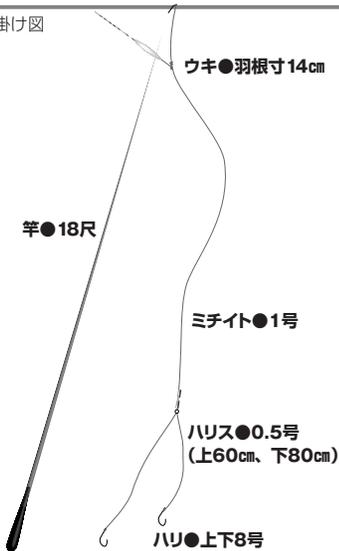


サワリだけで 決めアタリがないとき

エサを練り込む。10回を目安に30回まで。

ここが
ポイント

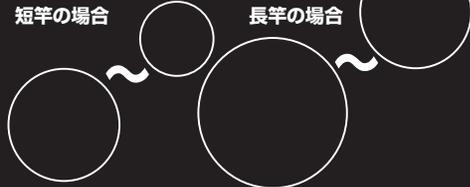
●長竿仕掛け図



エサの大きさ 実寸大

短竿の場合

長竿の場合



直径 10~15mm

ナジミが出ないときは大きく、なじみ過ぎてアタリが遅いときは小さくする。

直径 15~20mm

ナジミが出ないときは大きく、なじみ過ぎてアタリが遅いときは小さくする。

オモリ

短竿の場合

長竿の場合



「絡み止めタングステンオモリ」1g+0.25mm厚
板オモリを3mm×17mm。

「絡み止めタングステンオモリ」1gを1個+0.25mm厚板オモリを25mm×17mm。